



出張報告届

令和7年11月20日

吹田市議会議長様

会派名 立憲民主党

代表者氏名 西岡 友和

出張者氏名 西岡 友和

下記のとおり出張したので届け出ます。

記

出張先	フェニックス・プラザ 福井市田原1丁目13-6
期間	令和7年10月30日から10月31日まで2日間
出張の成果	別紙のとおり
備考	中核市サミット2025 in福井に参加

「中核市サミット」の参加報告

令和7年11月20日

西岡 友和

中核市制度は、国、府から多くの権限が委譲されたことで、より身近な行政サービスが求められるようになっており、各市が地域の実情に合わせた政策をつくることが重要である。

今回のサミットでは、人口減少、公共施設のあり方、デジタル化、広域連携、防災など、現在の自治体が直面している課題について幅広い議論が行われた。福井市の都市政策や周辺自治体との連携の取り組みについても視察が行われ、吹田市として参考にできる点が多くあった。

サミットは福井市の「フェニックス・プラザ」を中心に開催され、全国の中核市の市長、市議会議員、行政職員、一般の参加者など約500名が参加した。

会場内の複数の会議室を使用し、基調講演、全体会議、市長会議、打ち合わせ、記者会見などが同時進行で行われる大規模なものであった。

また、行政視察では福井市だけでなく嶺北地域の自治体に取り組む都市政策が紹介された。福井駅前の再開発、歴史文化資源の活用、広域でのまちづくりの取り組みなど、地域の実情に合わせて創意工夫がなされており、吹田市にとっても多くの学びがあった。

国、府から移譲された仕事は、保健所の運営、都市計画、福祉行政など住民生活に密接なものが多く、市が主体的に判断する場面が増えている。市民生活に影響の大きい事務が増えたということは、市として責任をもって判断し、市民に分かりやすく説明していく必要が強まっているということである。

吹田市は他の中核市と比べて特殊な状況にあり、人口増が継続しているが、他の中核市では人口減少と高齢化が進んでいる。働き手が減ることで市政運営にも影響が出始めており、職員をどのように確保するか、業務の効率化をどう進めるかが大きな課題となっている。AI・デジタル技術の活用や、職員一人ひとりの負担を減らす工夫が必要であるという意見が多かった。

DXは単なる便利なシステム導入ではなく、まちのデータを分析し、政策に活かす段階へと進み始めている。福祉の相談データ、道路や公園の管理情報、交通量データなどを組み合わせることで、将来の課題を予測し、早い段階で対応できる可能性がある。中核市同士でのデータ標準化も議論されており、吹田市としても遅れないよう取り組む必要がある。

今回特に印象的であったのは、福井市が中心となり周辺自治体と進めている「嶺北連携中枢都市圏」の取り組みである。人口減少が進む中で、医療、防災、観光、公共交通などを自治体単独で維持するのは難しくなっており、複数の自治体が力を合わせることで地域全体の力を高めるという考え方である。これは本市が進めるNATSにも応用できる考え方

である。

視察では、福井駅前の再整備、一乗谷朝倉氏遺跡の保存活用、広域連携による観光政策などを見聞きした。一乗谷朝倉氏遺跡という替えの利かない「核」を、単なる観光地としてではなく、教育・文化の中心として位置づけることで、都市の魅力を高めている。これは、現代的な都市である吹田市にも応用できると感じた。

吹田市には、一乗谷のような戦国の城下町遺構はありませんが、千里ニュータウンや万博記念公園といった、日本の戦後史における「歴史遺産」が多数存在する。福井市が一乗谷遺跡博物館を核としたように、吹田市も「万博史」や「ニュータウン開発史」に特化した、高度な学術的価値を持つ博物館・資料館機能を強化し、都市の歴史を紐解く観光拠点を設けるなど、調査、研究を進めたい。

最後に、吹田市は大学や公園、企業など多くの資源を持つ都市であり、北摂全体の発展に貢献できる立場にある。市として主体的に連携を呼びかけていくことが重要である。

また、行政サービスの利便性を高めつつ、職員の働き方改善にもつながる DX を本格的に進める必要がある。道路点検の AI 化、福祉相談データの分析、オンライン手続きの拡充など、市民の生活を支えるデジタル化を計画的に進めていく必要がある。

今回の中核市サミットは、同じ立場にある全国の市が共通の課題に向き合い、互いに知恵や工夫を持ち寄る場であった。福井市の取り組みは、吹田市にも大きな示唆を与えるものであり、これからのまちづくりに活かしていきたい。